

野田一夫：問題解決学総論（入門）：特別講義

オムニバスによる問題解決学総論の B クラスの第 13 回目として、野田一夫先生がご登壇。

冒頭から熱いメッセージが炸裂。この熱さは文字では伝えきれないですが、ポイントをまとめていきます。

<導入>

いきなり「メモなんて取るな。俺の顔を見て話を聞け！！」とがつん。「聞き手が聞く姿勢を示すからこそ、話そうと思うんだ」、と（この指摘が後の問題解決の話に繋がります）。

まずは、なぜ大学があるのか、大学に通うのかについてから話がはじまりました。

私（野田先生）が、今までの人生で一番くだらないと思っているのは、「自分が大学で受けた講義」だ。大学というのは、本来、学生のその後の人生に直結しているべきものはずだ。それにも関わらず、当時の大学教員は、研究者面（ずら）して教員としての自覚がない人ばかりだった。そんなひとの話なんて心に響くわけがない。若者の人生に影響を与えないような大学は大学ではない。だから、あるべき大学、つまり教育に真剣に取り組む、卒業後の人生に影響を与えうる大学をつくったのだ。

<問題には 2 種類ある：>

話は、問題解決学に進みます。

問題は、大別すると二つに分けられる。自分一人で解決できる問題と、自分一人では解決できない問題がある。一人で解決できるような問題は、たいした問題ではない。みんなで取り組まなければ解けない問題こそ、解くべき問題だ。複雑な問題は、一人で解決するのは難しいからだ。

大きい問題を解決するには、たくさんの人間で解決を目指さなければならない。ただし、単に何人もが集めればいいということではない。各自が自分の力を発揮し、問題解決に参加していかなければならないのだ。

複数人で問題解決をする際、避けて通れないのが「会議」だ。ただし、日本社会では、若手・下っ端が発言できるような雰囲気はない。問題解決に貢献しろといっても会議では発言すらできないような土壌がある。

しかしそれではもったいない。若手でも問題解決に役立てると思うなら発言すべきだ。はじめは「なんだこいつは生意気なやつだ」と思われるかも知れない。しかし、何回も繰り返していけば、発言できる雰囲気になる。変わり者とは思われるかも知れないが、発言しないなら会議に参加する意味は無いだらう。

さて、何人もが解決を目指さなければならない問題は、どういうメンバーで解くべきなのだろうか。「三人寄れば文殊の知恵」というが、3人が異なる視点、異なる能力がある人が集まるから知恵が生まれる。みんなが同じ考えのメンバーが集まったって知恵はでないだろう。

さらにいえば、たとえ多様なメンバーが集まっても、その人達が意見を表明しなければ、相乗効果は生まれない。だからこそ、会議では遠慮せずに発言すべきなのだ。

ただし、各自の発言に任せていては、生産的な問題解決ができない。せっかく有能なメンバーを集めても、その能力が活用されなければ意味が無い。つまり、メンバーから意見や知恵を引き出せる能力（人材）が必要なのだ。それがチェアマンの能力だ。良いチェアマンがいれば、どんどん意見や知恵を引き出されるだろう。

（メモ）チェアマンが話や能力を引き出すように、聞き手も話し手から話を引き出す必要がある。冒頭にいった「聞き手が聞く姿勢を示すからこそ、話そうと思うんだ」ということがここに繋がります。

そして、チェアマンに必要な能力は、構想力と表現力とだと思う。まず、構想力だ。問題を解決したときにどのようになっているかをイメージせずに問題なんて解けないだろう。問題解決には、その後の青写真がいる。これを描くのが構想力だ。

ただし、このイメージは共有させなければならない。目指すべきイメージなしでは、みんなで問題を解決することは難しいだろう。だから、表現力が必要

なんだ。描いた青写真をいかに伝えるか、それなしに、複雑な問題は解決され得ない。

では、どうやって表現力を身につけるかだ。それは、自分の感性を磨くということだ。たとえば、優れた画があるとするだろう。その画は、いろいろなものを語りかけてくる。

たしかに本を読むという勉強もあるだろう。ただし、それだけでは感性は磨かれない。だからどんどん美術館に言ったりすればいい。東京にある大学に通っているメリットは、こういう感性を刺激する機会に接することが容易だということところにもあるのだ。

若かりし日に受けた刺激とそれによって培われた感性（清純な気持ち）は、大人になっても忘れない。大人になって変なことをする人間は、こういう青春時代をすごしていなかったのだろう。そう考えると、みなさん（学生）は、それほど時間が残されているわけではない。表現力を一生懸命身につける努力をすべきだ。そのためには、学校にいないときの時間の使い方も重要なんだ。皆さんの時間は、大学にいないときの方が長いだろう。だとすれば、人生を通じて表現力を付けるべきだ。

女性は毎日鏡を見るだろう。男性も毎日鏡を見るべきだ。そこで、最高の表情をつくるんだ。その表情を人に見せるんだ。人間はみんな役者なんだ。これも表現力なんだ。

そして、表現したいなら、姿勢や服装にも気を配れ、同じことを言っても、見た目です得力が異なるだろう。今日は暑い。だから俺（野田先生）だって、今日Tシャツで来た方が楽だ。でも、Tシャツでラフな格好で僕が話をしたって、みんな聞く気がしないだろう。だから、これだって表現には必要な意識なんだ。

人を引っばる力は権力ではない。真のリーダーは、この人についていきたいという魅力を示せる人だ。そう考えれば、リーダーには表現力が必要なんだ。

だから、音楽をきけ、絵画を見よ、感性を刺激せよ。

もう一つ重要なのは、達成感だ。僕（野田先生）は山岳部だった。あるとき、「山に頂上がなければ、登山をするだろうか」と考えたことがある。答えは、Noだ。困難に立ち向かうのは、達成感があるからだ。達成感があれば、それが表情に出る。それを伝えたい。だから、感性を刺激するだけでなく、達成感が得られる困難に若いうちに取り組みことだ。それによって、さらに表現力が高まるだろう。

<まとめ>

冒頭から最後まで熱気あふれる話が展開され、あっという間に 60 分が終了。いろいろな話が熱く語られました。学生にとって、まさにこれからの人生に影響をうける 60 分になったはず。これが野田先生の目指す大学なんだと教員にとっても刺激的な 60 分でした。

（後記）できればこれを Live で皆さんに聞いて頂きければ良かったのにと、まとめ役としての表現力の低さと、Face to Face の素晴らしさを改めて痛感しました。